



## 一貫コース通信

### 答えのない問いに向き合うということ

まず、ごく個人的な述懐から始めることをお許しいただきたい。西暦 2000 年当時、私は台湾にいた。いわゆる語学留学である。そのとき、現地は台湾総統（大統領）選挙のただ中にあり、私も強い印象を持った。この選挙の結果、史上初の民進党（ごく大雑把に言うと台湾独立派政党）政権が誕生し、現在の蔡英文政権につながっていくのである。そして、当時、選挙の争点となっていたのが「中国との関係」であった。テレビを見ても、町の人々と話しても、各種の集会を覗いてみても、誰もが「中国との関係」について、それぞれの立場で何らかの考えを持っていた。いや、持たざるを得なかった。彼らにとって「中国との関係」は、すでにそれほど肌感覚で深刻な問題だったのだ。

近年、香港、台湾などの状況を見て、日本でも中国脅威論が大きく取り上げられるようになった。そしてネット上では過激で安直な言葉が飛び交う。だが、ここで書きたいのは別に政治的な立場の話ではない。ここで問題にしたいのは、この 20 年間、台湾人がこれを切実な問題として向き合っていたまさにその時、日本人は何を考えていたのか、ということだ。日本人の多くが、薄々「そこに考えねばならないことがある」ことを知りながら、20 年近くの間ほとんど何も考えずに過ごしてきたのではなかったか。

「じゃあ、どうすればいいの？教えてよ！」

そう聞き返したくなるのは人情だ。国家間の問題、環境問題、新型コロナへの対応に至るまで、世の中には誰も答えを教えてくれない問いが山積している。答えを教えてもらえない、ならまだいい。今問題にしているのは、そもそも答えのない問いだ。そういう問いに直面したとき、我々はどうするだろうか。薄々「これではまずい」ことを自覚しながら何もしないし考えないかもしれない。あるいは答えの分かりきった問いにだけ答えて「自分が出来る人間でいる気」になるかもしれない。ことによっては「悩む人」や「自分と意見の違う人」を馬鹿にしたり攻撃したりすることすらあり得る（ネット世論がそうなのではないか）。いずれも「それ以上考えることを止めている」という点では同じに思える。しかし、そうして問題を先送りにした先には、より深刻な破局が待ち受けていることも多い。そうでなくても「誰かに決めてもらう」生き方は避けられない。私はたとえそれが「正解」でなかったとしても、自分で出した結論、下した決断に従って生きていたいと思う。仮にそれが結果として間違いだったとしてもやり直せるはずなのだ。答えのない問いに向き合い、自分で考え、自分で結論を下す。生徒たちには「模範解答」を求めるのではなく、日々の学びを通して「考え続けることに倦まない能力」を養って欲しいと思うし、何より我々大人がそのようであらねばならないと、自戒を込めて思う。

